

# 随筆「5センチになつた母」を刊行

橋爪法一さんが3冊目

還暦を迎えるころになつて、離れて暮らす叔父や叔母、そのつれあひ。子どもたちと暮らす叔父や叔母もまた……

「5センチになつた母」



ものころ、頼もしく見上げた大人たちがいつの間にか病がちになり、ある日訃(ふ)報が届く。ともに暮らす父母もまた……頭では分かっている、どこか理不尽な時の潮の速さ。まだまだと思つても自身は落ちて、老境とは慌てて思い巡らす。答えなど簡単に見つかるはずもない。

アンソロジー「5センチになつた母」を同時代社から刊行した。定価千円。「幸せめつけた」「春よ来い」に次ぐ三冊目。シリーズと呼んでもいい。文章は磨かれ、文末の切り上げが小気味よい。五十編を読み切るのにはあつという間だが、何度も読み返したくなる。

子どもたちや亡くなつていく親せきたち、困難に耐え再び歩き出す地域の人など、近しい人々のエピソードで織りなされる。酪農家として時流と戦い、共産党員として地域政治を担い、疲れを知らず活動する。著者はさぶる強い人、に見える。しかし、心は柔らかな愛情にあふれ、小さな美しい物を見逃さない。シリーズを通して知られる人間の奥。

著者は身近な死を静かに受け入れる。張り裂けんばかりの悲しみは、読者の想像にまかせ、亡き人が輝いていたときの思い出の一コマをそっと差し出す。すると、その死はなぜか虚しいものではなく、一つの人々が完結した意義ある何かに見えるのだ。そこには言葉がけすべき何ももない。大きな自然の中から生まれ出て、また自然に返っていく、命の素晴らしさが香るだけだ。